

# 学びのたより

東海国語教育を学ぶ会

2011年5月 7日

文責：JUN

## 5月、これからの一年を見通し描くとき

### 1. 4月

ゴールデンウィークが終わり、学校はいよいよ本格活動のときになります。

子どもたちと出会って一か月の目まぐるしい日々を終え、ようやく辿り着いた連休、先生方はほっと一息ついておられたことでしょう。けれども、つかの間の休みの後に本格的な子どもたちとの毎日が控えているのです。そのことがわかっていますから、休日であってもあれこれと学校・学級のこと、子どものことを考えているのが教師というものでしょう。

4月はもう過ぎ去りました。しかし、その4月は一年間の営みにとってとても重要なものでした。新年度の体勢を整えるための諸会議、学校のさまざまな活動を軌道に乗せるための多くの事務をこなさなければならないのが4月ですから、そういう意味で重要なのは当然です。けれども、そういうことばかりに神経をすり減らしてはいられません。4月は、それぞれの学級にとって、もっと言えば、子どもたちにとってとても重要な時期だからです。ですから、教師としてもっとも力を注がなければいけないのは、事務分掌ではなく子どもたちのことです。

わたしは、この1か月で、ともに学ぶことになったそれぞれの学級の空気が決まるのだと思っています。自分たちにかかわる教師はどういう先生なのか、クラスの子どもの雰囲気はどうなのか、そして何よりもこの教室の価値観はどうなるのか、そういった諸々のことに子どもたちは出合い、それを感じ取り身につけるからです。たかが3週間、されど3週間です。

本年度、その4月にわたしは3つの学校の訪問要請を受けました。この忙しい時期に外部協力者を招聘して研究会を実施する学校は少ないでしょう。けれども、3校はわたしを招聘してくれたのです。4月の大切さがわかっているからでしょう。

そのうちU小学校では、全学級参観の後、わたしの感じたことを学年別に聞く時間をとってくれました。わたしは、わたしから話す前に、先生方の思いを尋ね、それから話をするように心がけました。その際、わたしが感じたことは、ほとんどの教師が、期待と不安の入り混じる中で、新しい学級への自分の対応が今のままでよいのかどうか探っている状態だということでした。この1か月という教師としての子どもたちへのかかわりはほとんどだれにも見てもらってこなかったのでしょうか。それだけに、その日、わたしにどう見られるかはドキドキ状態だったものと思われまます。

話し合いを終え、椅子から立ち上がる際の1人ひとりの教師の表情はさまざまでした。ほっとした表情の人、考え込むような表情の人、何か思い当たることがありそうな人、

手掛かりをつかんだという雰囲気の人。明日から取り組むことが見えたという感じの人、などなど。

その中に、「よかったあ！」と口に出して帰っていく人がいました。それは、わたしによい評価をしてもらったという「よかった」ではなく、こういう時間をもてたことがよかったという意味合いに感じられました。

教室参観、そして振り返りの対話はともに短い時間のものでしかありませんでした。それでも、この時間が、何人もの教師のそれぞれの教室のスタートにとって、少しは力になれたのではないかと思います。

ゴールデンウィークが明けたいま、その学校では、本格的なそれぞれの教師の取り組みが始まっていることでしょう。そして、それは、その学校だけのことではないのです。すべての学校のすべての教室でそうであるはずです。4月で生まれたこと、4月で感じ取ったこと、よかったと思われることでも、よくなかったと思われることでも、その一つひとつがすべて基盤になって5月の営みが始まるのです。

## 2. 5月は？

4月が、子どもたちやクラスとの出会いを形作り、子どもたちの状態をとらえることと学びの価値観を醸成することを重視したのと比べて、5月は、これからの一年を見通し、これから一年のありようを描くときです。

こういう授業ができるクラスにしたい、こういう学び方をする子どもたちにしたいと考えることはいいことです。教師ならそのくらいの意欲をもって当然です。けれども、急いではなりません。さまざまな子どもと気持ちを合わせて作り出さなければならぬのが学級づくりであり授業づくりだからです。思いがつながり、一つひとつのことがそれぞれの心に落ちるには、それ相当の時間がかかるのです。

わたしは、どんな年度でも、秋、11月を一つの目標にしてきました。急いではならないと戒める意味でそう考えることにしたとも言えますが、それよりも、そう考えることによって、11月までの道のりを想定することが大切だと考えたからです。

それには、まず、4月にとらえたクラスの感触、子どもたちの実態をきっちり思い起こす必要がありました。思い描いた11月のすがたが単なる願望だけにならないようにするには、今の事実ができるだけみえていなければなりません。そして、そんな実態の子どもたちに対する教師としての自分自身のよさも不十分さもみえていなければなりません。どんなことでもそうですが、己を知らなければ創造的なことはできません。しかし、この己を知ることほど難しいことはないのです。自分のことほどみえないものはないからです。また、子どもたちの様子も、日々、夢中で立ち向かっているため案外みえていないものなのです。だから、わたしを招聘した学校の取り組みはよいのです。とは言っても、わたしが子どもたちの前に立っていた頃の学校ではそういう研究会はありませんでした。だから、わたしは、同じ学年の教師にクラスの子どもたちの印象を尋ねたり、授業を録音・録画したり、こまめにとった日々の記録を読み直したりして、5月始まり時点での実態をじっくりみつめるようにしていたのです。

そうしておいて、そういう状況の子どもたちと、こうありたいと思い描いた11月のすがたを結んでみるのです。そうすると、そこに道ができます。ずいぶん距離のある道

になるかもしれません。アップダウンの激しい道になるかもしれません。障害物いっばいの道かもしれません。いえ、結んでみたものの11月は遥かかなたにかすんでいて、道が途中から見えなくなっているかもしれません。どちらにしても、これから、その道を歩いていくことになるのです。

わたしは、そのつないだ道にいくつもの一里塚を見つけるようにしていました。つまり、この子どもたちと真っ先にやらなければいけないのはこういうことだ、それが一応の成果を上げたら次にはこういうことというように、いくつものスモールステップを設けるようにしたのです。

このスモールステップは、ある程度の経験のある教師にしか設定できないように思われます。けれども、子ども相手のわたしたちの仕事は、一度として同じことはありません。つまり、どれだけ経験しても、過去の経験にあてはめるだけでうまくいくとは限らないのが教育の営みです。わたしの経験を振り返ってみても、一回一回、一年一年がみんな違ったものになりました。新しいものになりました。だから面白いし難しいのです。そういう意味では、経験に頼るよりも、そのときそのときに、子どもの事実を、全感覚を動員してみることのほうが大切です。

本年度は、小学校においては、学習指導要領が改訂され、教科書も新しい内容になりました。つまり、これまで取り扱ったことのない教材がかなりあるということになります。ということは、教科書を一通り読んでみないと、一年間の見通しが立たないということになります。ですから、わたしは、4月例会において、5月の連休明けまでに斜め読みでもよいから教科書に目を通すようにお薦めしたのです。

### 3 振り返るポイントは？

ゴールデンウイーク明けのスタートの大切さはよくわかっていただけたでしょうし、そこで、クラスのこと、子どもたちのこと、そして自分自身の授業のことを振り返ることの大切さもわかっていただけたことと思います。

けれども、この振り返りが案外適当になってしまうことがあります。それは、何を振り返るのが曖昧であったり、振り返ろうとしてもそれに見合う資料や記録が整ってなかったりするからです。そこで皆さんの参考にしていただくために、少なくともこれだけの事柄については振り返りをしてほしいと思うことを列挙してみることにします。

- ・ 名簿を見ながら、一人ひとりについて、どんなことがあったか、この子のよさはどこにあるのか、これからどんな力を伸ばしていきたいか、この子にはどんなかわりが必要なのかを考え、考えついたことを書き出すようにする。
- ・ 子どものつながりはどうかと思い返す。だれかが話している時に、他の子どもたちはどの程度聴いていたか、聴いているときの表情はどうだったか、だれかの言ったことに話がつながっていった時があったかどうか、横のつながりのありなしを振り返る。
- ・ 教室にいたことがつらそうな子ども、自分を聞くことができず暗い表情だった子ども、乱暴な言動が目についた子どもがいなかったかどうか思い起こす。そして、該当する子どもがいたら、表面的・現象的なことだけに気を奪われず、何がそうさせてい

- るのか、どこに切り込む糸口があるのか、そういう目線で考え始められるようにする。
- よく話す子ども、すぐ教師のところに寄ってくる子ども、目立った行動をする子どもはだれなのか、それに対して、話そうとしない子ども、教師を遠巻きに見ている子ども、目立たない子どもはだれなのかをとらえるようにする。そして、そういう子どもに対して、他の子どもたちがどう接しているか、そのありようを思い起こす。そして、当然のことながら、そうなっているのはなぜなのか、そしてそういう子どもたちの気持ちを前向きにする糸口はどこにあるのか、そういう思考ができる心の態勢をつくる。
  - 子どもが考え、その考えの擦り合わせによって探求する「学び合う学び」が秋、11月にある程度花開かせたいと考え、それに向けての歩みを開始できたかを振り返る。そういう意味では、拙著『聴き合うつなぐ学び合う 2011』のI章の4「『学び合う学び』始まりから深まりへ」(同書38ページ)において掲げた9つのステップが参考になるように思う。
  - 何よりも、自分自身が教師として意欲と希望を抱けているか振り返る。教師の仕事はもともと複雑で一筋縄ではいかない困難なもの。その困難の先に、ささやかかもしれないけれどもいくつもの喜びが待っている。子どもと心を通わせる喜びが待っている。自分はそれを求めて教師になったのだと改めて思い直す。

もちろん振り返るのはこれ以外にもたくさんあるでしょう。わたしが掲げたのはその一部でしかありません。要するに、振り返るから先がみえるのです。

こうして、これからの一年が描けてきたとします。そうしたら、もちろん、直近の一里塚を見つめながら、確かな歩みをしていきたいものです。そこで、気をつけたいのは、何がなんでも描いた計画通りに実践していけばよいということではないということです。子どもとの営みには想定外は付き物です。思いがけないことが起きるのが人間のすることです。大切なのは、その想定外に対応するということです。計画は計画であり、その計画を大切にしながら、子どもとの事実に合わせて柔軟に方向を定め直していくということです。

教育の仕事は、今の事実と切り結びながら、常に、創造的に、先を読み、未来を切り拓いていく仕事なのです。5月は、その重要な一つ目の節目なのです。



### ●●● 新刊の紹介 ●●●

#### 『聴き合う つなぐ 学び合う 2011』

「学び合う学び」を希求する多くの人たちに、今、どうしても伝えたいこと、分かち合いたいことを、渾身の思いをこめて書き上げました。

(自費出版)